

山本伸一（編著）

脳卒中×臨床 OT

—「今」、リハ効果を引き出す具体的実践ポイント—

中村 春基

（日本作業療法士協会，会長）



山本伸一氏は、脳血管障害に対する作業療法を、知識・技術面からリードする一人である。「活動分析研究会」で培われた知識と技術のエッセンスが本書に凝縮されている。サブタイトルに「リハ効果を引き出す」とあるが、「作業療法」について書かれている。

本書を頼りに、「今」あなたがやっている「作業療法」を見直し、少しでも利用者の機能と活動、参加が改善すれば、本書の目的は達成されたと思う。

さて、どの書籍でもそうであるが、まず「発刊に寄せて」と、「はじめに」の項をお読みいただきたい。本書では、「発刊に寄せて」で山梨リハビリテーション病院院長の中澤良太氏が「目の前の患者に対し、真摯に向き合った結果がそこにある」と題し、同医師の山城亘央氏が「セラピストの皆様へ実体験を通して、感覚-知覚のあり方やリハビリ訓練プロセスを問う」と題して記し、そして、山本氏が「はじめに」で発刊に携わっ

たすべての方々の思いを述べている。以下に本書の特徴、魅力を記すが、読み終わった後には、実際に山本氏の指導を受けてみたいと思われるに違いない。

全体はSTEP 1~7から構成され、STEP 1 臨床推論のための概論①では、「脳卒中片麻痺」を片側の麻痺ではない全身の障害として捉え、知覚-運動、運動・動作、姿勢、歩行、体幹、の捉え方について述べている。STEP 2では、概論②として、個別性、感覚-知覚アプローチの介入原則について整理されている。STEP 3~5は実践の紹介で、感覚-知覚に基づいた正常運動分析、脳卒中対象者の動作の特徴、介入のポイント、実践、考察の順で、運動療法アプローチ1（背臥位・寝返り、起き上がり・座位、リーチ、立位バランス、移乗）、運動療法アプローチ2（体幹の促通、パーツの促通として、肩甲骨、骨盤、足関節、手）、活動介入アプローチ（更衣、トイレ、食事、整容、入浴）等についてまと

められている。STEP 6では、Activity アプローチ（Activityを活かすとは？、輸入れ・輪投げ、コーン、お手玉、新聞紙を使用したActivity、おはじき、書字）について、Step 7では応用事例として、半側空間無視、前頭葉症状、失語症、認知症、ポジショニング（背臥位、車いす）、肩の痛み（インピンジメント、ストレッチペイン）でまとめられる。またColumnとして、新人、非常勤の悩み、子育て等、実体験が語られている。

本書籍が「臨床力」の向上に寄与することは間違いない。49名の執筆者、イラスト担当4名、まさに山梨リハビリテーション病院作業療法科の総力を挙げての取り組みに感謝をしたい。このような書籍が次々と出版されることを願っている。

〔 B5判 312頁 4,200円+税
シービーアール刊
☎ 03-5840-7561 〕